

Ryoko INOUE, “The Ultimate Desire of Human Beings: To Be Accepted” に関する査読論文

人あるいは論文が受容されるということ

加藤知佳子
豊橋創造大学

要旨： INOUE は”The Ultimate Desire of Human Beings: To Be Accepted” において、人間にとって究極の欲求は受容されることであると論じている。しかし、大変残念なことに、名詞や疑問文が羅列されるままになっていたり、1 ページ近くの長さに及ぶ文が尻切れとんぼで終わっていたりと、文章そのものが内容の正否を論じられる状態ではない。また、内容についても、受容されている状態や受容された結果についての言及は数多くあるものの、そもそも受容する／されるとはどのようなことであるかということについては、十分に同定されているとはいえない。よって、評価は-2とし、書き直した上での再投稿を期待する。

キーワード： 受容 未知な 理解を超えた

1 「それがどうしたの？」

たとえば、最初の節、Various Desires of Human-Beings には、Appetite, thirst, sexual (原文のまま), sense of self-efficacy 等、さまざまな欲求が並べられている。さまざまな欲求、すなわち、これこれ、というわけであろうが、「それがどうした」という肝心の部分が、書かれていないのである。それぞれの欲求の関係についても、まったく言及されていない。恐らく、その中の究極の欲求が「受容されること」なのだろうが、それならばそう書かなければいけない。

また、さまざまな欲求といえ、マズローの階層説(マズロー, 1954)が有名であるが、マズローの階層説における究極の欲求は、周知のとおり「自己実現」である。愛、集団所属、他者による承認など、INOUE 論文で挙げられた受容と関連の深い欲求は、最高位ではない。それについては、恐らく何らかの見解を有しておられると思うが、もしそうならば、マズローを引用した上で、きちんと議論してみてもどうか。

同様の羅列は、次の節にも見られる。「愛されるということ」は「大事にされるということ？」だろうか、「与えられるというこ

と？」だろうか、等、それらは、「ああでもない、こうでもない」のか、「こういうのもある、ああいうのもある」ということなのか。

「愛されるということはどういうことだろうか？」と考えて、これらのことを思いついたということはよくわかる。しかし、やはり「それで？」という問いが残る。「それがどうした」という部分がないからである。

これでは、残念ながら、内容の正否を評価しようがない。

2 論文は自分のために書くものじゃない (内田, 2010b)

自分が関心をもっている問題について考えて、その過程をことばで表現してみる。それが論文を書く第一歩であることは間違いない。

しかし、「論文は自分のために書くものじゃない (内田, 2010b)」のである。内田 (2010b)の比喩を借りると、論文には、ああでもない、こうでもないと考え考え辿ったルートをそのまま律儀に記すのではなく、最短距離を示すという「読者サービス」が必要である。というのは、苦勞したのは著者の事情に過ぎないのであって、読者は「その苦勞を追体験しなければいけない義理はないから」

(内田, 2010b) である。

INOUE 論文は、自分が辿ったルートがそのまま記されている状態に留まっているように思われるし、どこまで辿り着いたのかも定かではない。

ちなみに、書き手が辿ったルートを読者が確かめるためには、引用文献がきちんとリストアップされていることが必須であるが、この点についても、INOUE 論文は十分ではない。唯一の引用文献である Harvard Business Review の 2011 年の巻は、実際には July & August 号しかなく、どの論文が引用されているのかも特定できなかった。この点についても確認をお願いしたい。

3 何がゴールなのか

他者から受容されるということは、大変重要な問題である。究極の欲求だと言われれば、マズローのいう「自己実現」のことなど忘れて、思わずその通りだとうなずいてしまうくらいである。

自分が他者から受容されている（と感じている）かどうかは、非常によくわかる。受容されているとどうなるか、ということについては、INOUE 論文に詳細に記されておりである。

しかし、他者を受容するとはどういうことか、どうすると受容したことになるのかと問われると、これは説明するのも実践するのも非常に難しいのではないだろうか。

他者から受容されると、INOUE 論文にあるとおり、まさに幸せで、創造性も十分に発揮できるであろう。しかし、なぜ受容されないと不幸せで、創造性が発揮できないのか。受容されないと、子どもはなぜ攻撃的になるのか。

これらの問いに INOUE 論文が答えているとは思えないのである。

4 受容のモデル化：思考実験の例

では、受容そのものに対しては、どのように取り組むことが可能だろうか。

たとえば、誰からも受容されないという場

合、「居場所がない」という表現がよく使われるが、対人関係における居場所というのは、ジグソーパズルにおけるピースの場所のように考えてよいのかどうかを検討してみるのである。すると、人間にとっての「居場所」とは、(あらためて言うまでもないが) 単なる物理的な空間の有無ではなく、他者がある人の居場所を作るかどうかという動的な問題を含んでいることに気がつかされる。

たとえば、「わたし」が大変疲れた状態で帰宅の途につくとする。電車に乗り込んだら、たまたま席が空いており、座ることができた。この場合、「わたし」は受容されたと感じるかどうか。この運のよさを神に感謝するということはあるかもしれないが、そもそも何者かに受け入れられたかどうかを検討する余地はないであろう。

では、電車に乗り込んだら席が空いておらず、乗客が席を詰めてくれて、あるいは、ある人が立ち上がって席を譲ってくれて、座ることができたとする。この場合は、思わず「ありがとう」ということばがでるだろうし、周囲の人に受け入れられたと感じられるのではないだろうか。

その際、電車の乗客は何をしたと言えるのだろうか。乗客は、「わたし」が乗り込まなければそのまま(ゆったりと)座っていたかったのに、自分の欲求を満たすことを犠牲にして、自分の居場所を「わたし」に譲ったのである。その際、「わたし」は、立たせておいても一向にさしつかえない、たまたま後から乗り込んだだけの、自分と対等な人ではなく、先に乗り込んだ自分よりも座席を確保すべき、そうしないといけなさそうな人と判断されたのである。

一方、席を譲られれば、すべて受容と言えるのだろうか。たとえば、「わたし」が「俺の席がないのか！」と乗客を恫喝して、無理矢理誰かを立たせたとしよう。この場合は、「わたし」の居場所が作られたという現象は起こっているが、「わたし」も立たされた乗客も、受容する／しないという現象が起こったとは感じないであろう。

居場所を作ってもらった「わたし」が、受

け入れられたと感じ、受け入れてくれた人の愛情を感じる際には、受け入れてくれた相手は、自ら何かを犠牲にして「わたし」に場所を譲ってくれているし（それができるだけ強い）、「わたし」をそのように遇すべき、自分とは違う人として接していると言える。

内田(2001)が依拠するレヴィナスは、他者と私との間に、戦いではなくコミュニケーションが成立するためには、出会いの瞬間、一歩先じて身を引く者が必要であり、それが道徳＝愛の起源であると言っている。レヴィナスにおける「他者」というのは、電車に乗り込んだ「わたし」の側に相当するため注意が必要であるが、端的に言えば、「理解を超えるもの」のことである。電車の例に沿って述べると、「わたし」が、乗客と同様に元気そうである（疲れている）人ではなく、その状態を想像することが不可能な、圧倒的な「他者」（若者にとっての高齢者、健康な人にとっての病人あるいは妊婦など、弱さによって形容される人）であると受けとめられれば、席を与えられるということになる。

確かに、妊婦検診に訪れた「わたし」が、同じように妊婦ばかりが座るベンチが空いていないからといって、先に座っていた人から席を譲られる可能性は低い。詰めてもらえる可能性はあるが、こういう状況だと、妊婦ではない別の人が、新たに席を作ってくれる可能性の方が高いであろう。

臨床の現場においても、身近な人、親しい人にカウンセリングを行うのは難しいと思われる。それはなぜか。周囲に受容されない子どもがなぜ攻撃的になるのか。受容されないとなぜ創造性を発揮することが難しくなるのか。

上記の思考実験に照らして考えると、次のように推察されるのではないか。つまり、理解可能な存在として扱われる、あるいは周囲が（いわば）勝手な理解にもとづいてその人を遇している場合、受容されたとは感じられず、周囲の予想を裏切る形で行動したり（たとえば攻撃する）、その人独自の才能を発揮する余地がなかったりするのではないか。なぜなら、他者とは本来、誰にとっても理解を

超えた存在であるから。

今回は非常に拙い思考実験を例に挙げたが、臨床家として事例を有しているのであればそれを取り上げるのもよし、文学、映画等を題材にするのもよし、素材は何でも構わないが、そもそも受容する／されるとはどういうことか、そのための要件を明示した上で、なぜそれが人間にとって究極の欲求と考えられるのかを論じてみてほしい。

5 採択されるということ

ちなみに、前掲の内田(2010a)は、「レポートにはなくてもよいけど、学術論文に必要なものというのは、「読む人への愛」です」と言っている。これはいわゆる「読み手への思いやり」であり、前述の「読者サービス」と言ってもよい。

内田(2010a; 2010b)が言うように、学術論文をレヴィ＝ストロースがいうところの「贈与」(1985)だと考えると、プレゼントをしようというからには、そもそも受け手に対する愛が必要だということもわからなくはない。

しかし、読み手への愛というのは、読み手が採択してもよいと判断すると同時に、感じられるものであるように思われることから、論文が採択される要件としては何が必要かという点については、別に論じることができると思われる。

論文も受容(accept)されるべきものであるが、さきほどの要件を適用することは可能であろうか。「読み手の理解を超えたものが付与されていなければ、採択されえない」と。

真の意味で、査読者の理解を超えていれば、偉大な研究の多くは当初はそうであったように、むしろ採択はされないであろう。査読者の力量を超えた論文は、決して採択されない。

では、採択されうる論文には何が必要か。少なくとも、読者にとって未知な(unknown)ものがなくてははいけないのではないだろうか。

「理解を超えた(unknowable)もの」とは、時代を超えて研究の対象になるような、完全に解き明かすことのできないもの（たとえば、心）であるが、学術論文に書かれたこと自体

は、論文に掲載されて周知のこととなれば、いずれは引用されることもない、当たり前のこととなるであろう。解き明かすべき対象は、恐らく永遠に、我々の理解を超えたものである。しかし、そこから得られた知見は、正しいことであればなおさら、いずれ先に進むための踏み石となりはてる。そこは、科学的な学術論文と、何世紀にもわたって読み継がれる書物あるいはテキストとの違いではないか。

つまり、論文が採択（受容）されるには（というより、論文たりうるには）、少なくとも査読者が「知らなかった」（あるいは主な読者が知らないであろうと推察される）ことが書かれている必要がある。

しかし、INOUE 論文には、そもそも査読者が「知らなかった」ことが書かれているかどうかを判断するために必要な部分が書かれていなかったように思われるのである。

実験系の論文において、単なる追試でも採択されるのは、「ここは未知でしょう」という点が明示されており、それが確かに未知である（推測すらできなかった）と受容されたからである。「海外のデータしかないので、日本で実験してみました」というだけでは、正直、腹立たしい場合もあるが、しかし、それすらないと、そもそも論文ではないと言われてしまう。ケース報告についても同様であろう。どこが未知で、どこが読者にとって「ニュース」なのか。是非、明示されたい。

さて、電車の例に沿って言えば、論文は席に相当するものであるが、そうすると、受容されたと感じて幸せになる「わたし」は、論文を採択する我々査読者ということになる。一見、採択されたらうれしいのは、著者の方だろうと思われるのだが、しばらく考えて、そうとは限らないことに気づいた。本考究会の趣旨を踏まえて執筆された、「こういう論文を待っていました」と言いたくなるような論文が投稿されれば、確かに「わかってくれてありがとう」と言いたくなるのは、我々の方であろう。我々も、当然そのような体験を切望している。書き直した上での再投稿をお待ちしている。

4 まとめ

INOUE 論文には、人間にとって他者から受容されることとはどのようなことかが書かれているが、そこには本査読者にとって未知のことが書かれているとは判断できなかった。それは主として、どのような知見を得たのかを読み取ることができるように書かれていないからだと思われる。

よって、INOUE 論文の評価は-2とし、書き直した上での再投稿を期待する。

引用文献

レヴィ＝ストロース, C. 荒川幾男他
(訳) (1985) 構造人類学 みすず書房

マズロー, A. H. 小口忠彦 (訳) (1971)
人間性の心理学 産業能率短期大学出版部

内田樹 (2001) レヴィナスと愛の現象学 せりか書房

内田樹 (2010a) 「ありがとう」と言いたくなる 街場の大学論：ウチダ式教育再生 pp. 203-207 角川文庫

内田樹 (2010b) 論文は自分のために書くものじゃない 街場の大学論：ウチダ式教育再生 pp. 208-214 角川文庫

加藤知佳子 (かとうちかこ)

現住所：愛知県豊橋市

所属：豊橋創造大学

440-8511 豊橋市牛川町松下 20-1

katochi@sozo.ac.jp

Reviewer's comments on Ryoko INOUE's article entitled "The Ultimate Desire of Human Beings: To Be Accepted"

To be accepted for human beings or for papers

Chikako KATO
Toyohashi Sozo University

Inoue described being accepted by other people as ultimate desire for human beings. However, some sentences are not sufficiently built for evaluating whether the description may contain unknown content for readers or not. In addition, although being accepted by others and its consequence are depicted, acceptance itself is not sufficiently identified. Therefore, the rating to Inoue's article is -2. Rewriting and resubmitting of the manuscript is recommended.

Key words: acceptance, unknown, unknowable

Chikako KATO
Toyohashi Sozo University
20-1, Ushikawa-cho, Matsushita,
Toyohashi, 440-8511
Japan
katochi@sozo.ac.jp